

〔文献紹介〕

伊藤重信著 長島町誌 下巻

「長島町誌上」につづいて「長島町誌下」が長島町教育委員会より出版された。本書は「上巻」の古代より近世につづいて、明治以後より太平洋戦争までまとめたものである。第四編近代の長島（明治・大正・昭和前期終戦まで）、第五編は生活文化と民俗、第六編は長島の人物誌から成り、資料編二が附加されている。

長島輪中は木曾川の河口にある農村で、古来より水害に悩まされたところであるが、明治初期にオランダ人工師ヨハネス・デ・レーケを招いて、河川改修を完成させた。第四編にはその改修工事に、輪中を切断して、川筋を整理したところが詳細に記されている。またその整理によって耕地を失ったり、多年の風水害に悩まされた人々が、北海道へ二五〇世帯も移住したことが記されており、激動する近代化のなかで変貌してゆく姿がわかる。

また第五編は輪中特有の水屋について写真入りでかなり詳しく書かれており、衣・食・住・信仰・口依・方言など興味が深い。特に口頭伝承による各地区の年中行事・風俗・方言など詳細であり、方言のアクセントが東京式に似し、尾張型の語法や語彙の分布が図示されているのも面白い。そして揖斐川が京阪式との境界である点を指摘している。このようなことは長島に生れ、長島で育った彼でな

ければ書けない。また変化してゆくなかで、農具・漁具・野良着・生活用具など写真に残している。これは将来大へん有意義なことと思う。

第六編の人物誌は三十六名の代表的な多士済済の人物をとりあげてあるが、これらの人々が長島に生まれ各方面で活躍したことを知ることができるし、資料編では西南戦争から太平洋戦争までの七〇年間の戦争犠牲者三四五名が連名で記されており、特に太平洋戦争では階級・叙勲・戦没月日・場所など調べている。

いずれにしても地形的に歴史的に地理的に、古来より激しく変貌してきた長島を、詳細に七〇〇ページにわたって記述されている。

郷土を愛え郷土を愛する一念で、しかも平易に町民の民政に役立ち「郷土教育に役立てたい」と彼が言っているように、たしかに他の市町村史と違って異色である。それに随所に「歴史の目」があり、私の史観・歴史随想など入っていて面白い。

A5判 七〇三頁 長島町教育委員会刊 昭和五十三年十一月  
四五〇〇円 (市郵学園短期大学・川崎 敏)

〔学界動向〕

IGU歴史地理学関係のシンポジウムについて

IGU「空間組織の歴史的变化」にかんするワーキング・グループ委員長、第二回IGUコングレス（東京）第九セッション（歴史地理学）コングレナイ、谷岡武雄教授より本会常任委員会へ、シ